

祇園小唄

作詞 長田幹彦（昭和三年 祇園の茶屋「吉うた」にて）

作曲 依々紅葎 唄 藤本二三吉 三味線 佐藤 さくら子

（一上り）

月は朧に東山 霞む夜毎の篝火に

夢もいざよう紅桜 惚ぶ思いを振袖に

祇園恋しや だらりの帯よ

夏は河原の夕涼み 白い襟足ばんぼりに

隠す涙の口紅も 燃えて身を焼く大文字

祇園恋しや だらりの帯よ

鳴の河原の水瘦せて 咽ぶ瀬音に鐘の声

枯れた柳に秋風が 泣くよ今宵も終夜

祇園恋しや だらりの帯よ

雪はしとしと丸窓に 積る蓬瀬の差し向かい

灯影つめたく小夜更けて ※もやい枕に川千鳥

祇園恋しや だらりの帯よ



祇園小唄（現代語訳）

（一）

春の月が東山にぼんやり浮かんで出ているわ。

夜になると、毎夜 鴨川に焚かれた篝火が、水面に霞んで見えてくる。

夢に出てくる紅桜のわたしは、咲くのか、散るのか、一向に進まず、まるであなたの事のよう。

離れて暮らす今、あなたと抱き交わした袖を解くなんて、どうしても思いを振り切れないわ。

ああ、祇園の舞妓は、恋しいあなたを思ってたらの帯を垂らすのよ。

（二）

夏になり、鴨川の河原に出て夕涼みをしています。もうあれから何年経ったかしら。

少し襟が替わって、白くなったわ。髪が生え際は、ほんのりとして綺麗になつたでし。

紅をキリッと引いて、切なくて涙が出てくる。あなたの思いを隠しているけど

私の体は、あの太文字焼きのように燃えているわ。

ああ、祇園の舞妓は、恋しいあなたを思ってたらの帯を垂らすのよ。

（三）

秋が深まる頃、河原に行むわたしは、水枯れた鴨川のように恋に瘦せて、

瀬音は咽ぶようだわ。叫びたくなるような、おきの鐘が聞こえてきます。

白川沿いの 柳の並木は 葉を落として、秋風が吹いています。

もう飽きたって、わたしのことを忘れていて、憎いひと。今夜も一晩中泣いているわ。

ああ、祇園の舞妓は、恋しいあなたを思ってたらの帯を垂らすのよ。

（四）

冬は、べた雪になつて、しとしと丸窓に積もってきます。

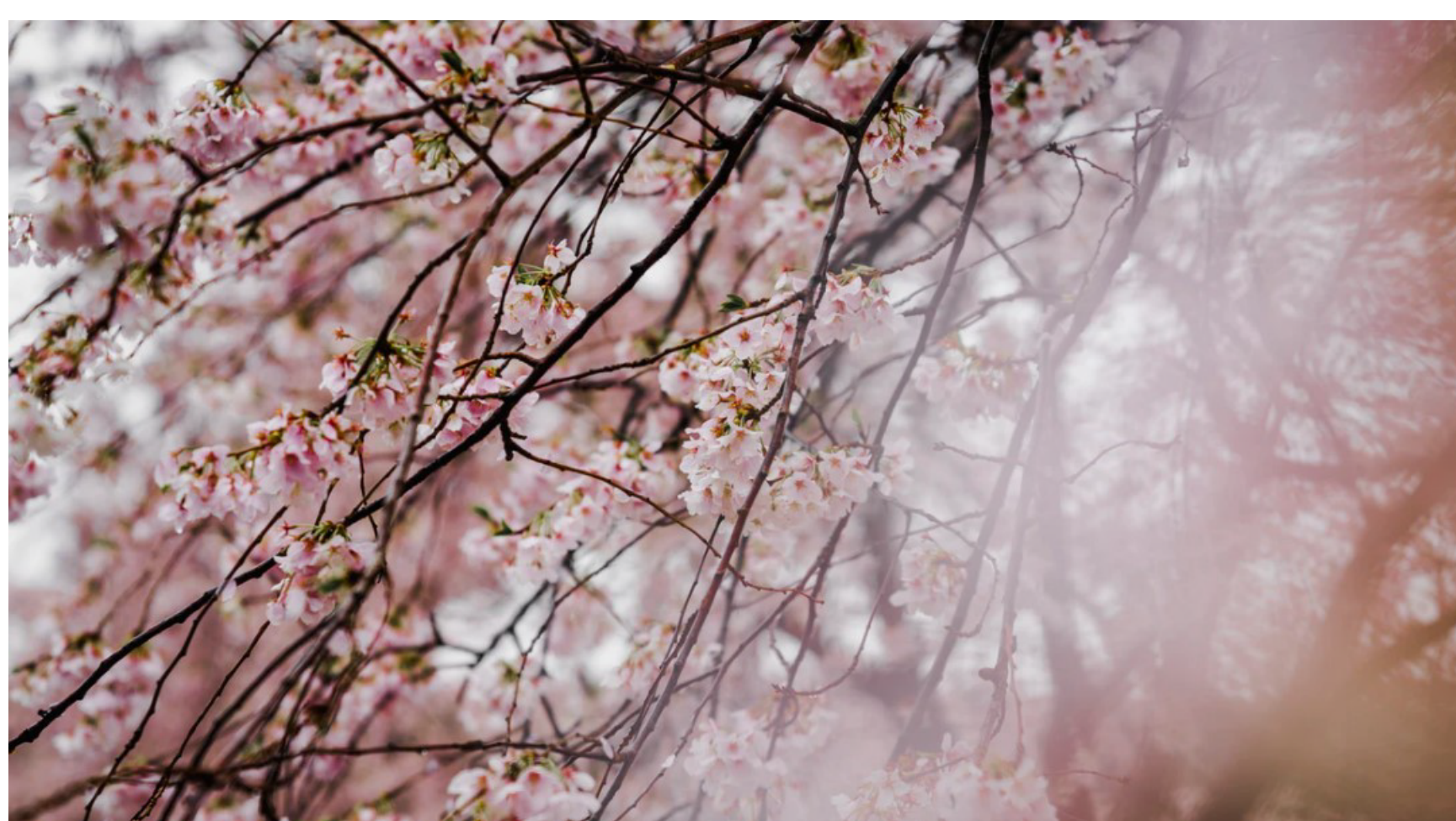
積る思いで何度も密かにお逢いし、今夜は二人きりなれて嬉しいわ。

部屋の灯りは、夜が更けると冷たく感じてきたから、

枕を共にして、つがいの川千鳥のように手を繋いで、あなたの温もりで寝たいの。

ああ、祇園の舞妓は、恋しいあなたを思ってたらの帯を垂らすのよ。

令和二年六月十五日 大中臣 正比呂 拙訳



【解説】

令和二年六月十五日 日本幻想小説家クラブ会員 大中臣正比呂

昨年（2020年）七月八日夜、京都市東山花見小路通四条下ルの火災で、お茶屋「吉うた」は延焼で焼失し、赤松を一本残すのみであった。昭和三年に長田幹彦が作詞した「祇園小唄」は、彼が

東京からよく遊びに来たこのお茶屋で書かれ、原詩が保存されていたようである。唄は、昭和五年（2020年）に依々紅葎の作曲により、浅草生まれの空若者 藤本二三吉がその見事な歌唱力をもつて

ビクターから世に出た。今もなお人々に歌い続けられている、東京で作られた京都の唄である。

十五才くらいで花街祇園に来る少女は、「置き屋」と呼ばれる家で芸者の修行を積む。

歌の主人公は、下働きの行儀見習いを経て、舞妓としてお座敷に出るようになる少女である。

それでも、五年もすれば一人前の芸者として客を前にして、お座敷を仕切るようになる。

十五才でも当時一般には、お嫁に行ってもおかしくない年頃であるから、モデルとなっている舞妓さんは十七、十八才の初々しさのある娘さんであろう。

祇園という花街に何年か暮らせば、恋も芽生える。

恐らくは作家 長田幹彦が相手ではなからう。舞妓さんを座敷に呼ぶ旦那衆でもなからう。

彼らは舞妓さんとの密会などは必要としないと思うからであるが、筆者の推察か。

筆者が住む新橋でも「半玉さん」と云われる、地方出身の芸者がいらつしやるが、やはり可愛いの

で、男性の恋心が動かされるのは、アリかも知れぬ。

舞妓さんが日々に接する若い男性とはどういふ身持ちの者か、読者の想像に任せることしよ。

その歌詞の一番に、前後して「夢もいざよう紅桜」とあるは、春に美しく咲く紅桜のような当の舞妓さんが、思いを寄せる男性との仲を夢見ても、なかなか進まないもどかしさを指しているのである。

続く「振袖」の段は、デートで振袖姿で抱き合ったけれど、今は離れて暮らす身の上だから、過ぎ去った過去の思ひ出として、秘かに思い慕っている様を云う。

駆け出しの舞妓さんは魅力が足りない分、色付きの華やかな着物や簪を付けさせられるが、何年か経てば、少し地味な着物になり、下着の「襟元」を白で強調しても色香が出せる。

しかも、舞妓は背首に白粉を塗るのだから、色物の衣装を着ても「襟元」が白なら、地毛の黒髪との境はグレースーション（ぼんぼり）となり、カワイイでしょう、というわけである。

口紅は「差す」か「引く」かである。お化粧で口紅を点す華やかな紅差指と言うが、その様子は紅を付ける普通通の女性のたしなみである。引き締めるのは「さあ」という出番の気持がこもるから、歌詞の二番の口紅は、「引く」と訳した。涙をこぼして客前に出る舞妓さんの涙とした一面である。

鴨川は氾濫が多い河川である。梅雨の時期は川は濁流と化すが、台風シーズンを通じて冬近くになれば、雨量は少なくなる。だから、鴨川の河川敷は途切れそうな流れの音がすると舞妓さんは感ずるのであろう。そういう折に神社の鐘がゴーンと響けば、小さな流れの瀬音から大きな鐘の音に転じて、叫びたくなるのではなからうか。筆者の想像である。

花見小路を経て祇園と呼ばれる一帯には、白川という町中の川がある。白鷺が降り立ち、川中で餌を啄む姿は風情がある。その街並は築橋あたりまで続くのであるが、川の両岸は柳の並木である。

秋ともなれば過半の柳葉は落ち、秋風が枝を揺らす。枯れた柳は、心も枯れ、涙も枯れ、失う男女の情愛の象徴でもあろう。「秋」「飽き」「掛けた言葉」で、昔から心変わりを楽しむ。

秋風は、心に吹き抜けてゆく、寂しくもある風なのである。

しんしんと降る、嚴寒の北国の雪と違って、京都の冬は寒まじりの雪が降る。歌詞の四番には、雪は丸窓に積もるとあるので、その家は普通の民家ではあるまい。丸窓は、やれているから、密会はその当時の「出会い茶屋」でなされたのであろう。「積る蓬瀬」とあるので、何度も逢引きをすることを示唆しているのだが、一方では「積る思い」を掛けた言葉でもある。夜が更けてゆけば気温は下がる。寝所の電灯の明かりも寒く感じてしまう。「もやい枕」は「もやい柱」の誤記の説もあつて、鴨川に枕を打ち、小舟を舫う（括りつける）ことから、「手を繋ぐ」という意味も生じるらしい。尚、川千鳥は川面をうがいで飛ぶことから、最後は二人で思いを遂げるといふ作詞者の粋な計らいになっていると云える。了

